ライデン大学蔵のホフマン蔵書について

金　子　　弘

はじめに

2006年の4月から9月にかけて，オランダのライデン大学日本学科に在外研究で滞在した。その際に，ホフマン（Hoffmann, Johann Joseph, 1805-1878）の蔵書について調べることができた。その結果の一部を報告する。

1　ホフマンについて

ホフマンは，日本語研究者として知られている。それは，ホフマンの著作として，ドンケル・クルチウス（Donker Curtius, Janus Henricus 1813-1879）の『日本語文典例証』（三沢光博訳，明治書院）や，『日本語文典』（三沢光博訳，明治書院）などがあるためであろう。

一方で，中国語やコリア語などの知識も豊富であり，ライデン大学図書館の著者データでは，oriëntalist（東洋学者）とされている。Japanologist（日本学者）といった分類があるかどうか確認できていないので，広い意味で東洋学者という分類がなされていると考えてよいのかもしれないが，ホフマンは東洋学者として記録されていることを確認しておきたい。

2　蔵書の来歴

ホフマンは1878年にライデンで亡くなったが，その蔵書（の一部であろう）がオランダのライデン大学に引き取られた。ライデン大学の蔵書目録である

Inventaris van het archief van de bibliotheek der Hoogeschool te Leiden / opgemaakt door den conservator W.N. Du Rieu（学芸員W.N. Du Rieuによって作成されたライデン高等学校の図書館蔵書目録）　蔵書番号 DOUSA 80 0811

のJ39　1880 Juli-September. Niewe-Werkenの最初に，Bibliotheek Hoffmann.（ホフマン文庫・蔵書）と書かれている204点の本のリストがそれである。ホフ

マンの所蔵本は，これ以外にもあったと思われるが，ライデン大学が引き取って目録を作成したのは，この204点である。「点」としたのは，その中に複数の巻で構成されている本があるためで，本を巻数や冊数で示すならば，別の数値になる。

また，引き取らなかった蔵書の目録と思われる本のリストが写本番号「BPL 2186 J8」にある。

Partial catalogue of Hoffmann's library.

とある写本である。王立ライデン民族博物館にとって「die niet behoeven te dienen (not needed to supplement)」(不要な) と説明があり，そのリストを見ると，「nippon woo dai itsiran」「Waranzii」など日本の書籍が並んでいる。写本の説明書きに「1878年6月12日付けの手紙に付けてある」とあるので，ホフマンが亡くなった1878年1月19日の直後から蔵書の整理がなされ，ライデン大学の目録に正式に登載されたのが1880年7月～9月だと推察される。

3　蔵書の分野

204点の蔵書を分野ごとに見てみると，次のようになっている。

印欧語関係	15	
中国関係	109	
日本関係	61	(日本と中国にわたるものは日本学とした)
その他の言語	9	(台湾語，ナマカNamaqua語，タタール語，ツングース語，満州語2，カシ語，アイヌ語，コリア語)
その他の書籍	10	(東アジア，中央アジア，オリエント，農学，ペルー，蔵書目録)

蔵書の記載順は，だいたいにおいて「印欧関係→中国関係→日本関係→その他の書籍」の順で並べられていて，ところどころに「その他の言語」の書籍が書かれている。

単純に蔵書数だけを見ると，ホフマンは中国学を中心として研究した学者と言えるだろう。それに付随して日本学にも詳しい学者と言える。ただし，日本関係の書籍をこれほど収集していた学者は多くないだろうということを考えると，日本学者として認めることもできる。なお，蔵書への書き込みには，満州語の文字やコリア語のハングルが書かれている部分もあり，インクの色などからホフマンの手によるものと推定できる。

印欧語関係の書籍には，比較言語学関係の書も含まれている。シュタインタールの，Charakteristik der hauptsächlichsten Typen des Sprachbauesやフランツ・ボップのGlossarium Sanscritum，マックス・ニューラーのVorlesungen über die Wissenschaft der Sprachеなどである。

日本関係の書籍の内，日本語の文法書として，コリャードやオールコック，ロニー，アストン，馬場辰猪そしてホフマンの書であるクルチウスやホフマン自身の文法書が含まれている。また，メドハースト，プフィツマイヤー，メルメ・ド・カション，パジェスの辞書もある。

4　書き込み

ホフマンの蔵書は，自身が買い求めた書籍であるということかもあってか，本に多くの書き込みが見られる。その字は，やや細めの黒のペン書きが主であり，どの書き込みも統一された字体であるから，ホフマンの書き込みと見なしていいだろう。コリャードの文法書など，当時でも貴重だったと思われる本にも，ホフマンの特徴的な字で「煎ズ」「センジ」などの字が書き込まれているから，ホフマンは（あるいは当時の人は），書き込みをすることにそれほどためらいがなかったようだ。さらには，付箋の張り込み，メモの張り込みなどが多数見られる。

日本学関係の61点について見てみると，読んだ形跡が見られる書物は次のようになっている。

書き込み有り	23
書き込み無し	29
未調査	9

その中でも，多くの書き込みが見られるのは，

① Proeve eener Japansche spraakkunst / van J.H. Donker Curtius, Leyden : Sythoff, 1857

② Elements of Japanese grammar / Rutherford Alcock, Shanghai, 1861

③ Colloquial Japanese / S.R. Brown, Shanghai, 1863

の文法書と，

④ An English and Japanese and Japanese and English vocabulary : compiled from the native works / Walter Henry Medhurst

の日本語辞書である。①はホフマンが校訂・出版した本であり，②③はホフマンが自身の文法書を出版する（1868）前に出版された文法書である。また，ホフマンは辞書を出す計画を持っており，その原稿も存在しているので，④の辞書は当

然であり，自身の辞書作りに役立てる心積もりがあったのだろうと推測できる。それぞれについて，若干のコメントを述べる。

① クルチウス『日本語文典例証』

この本の裏表紙には，西暦が書かれた付箋が4枚貼り付けられている。1857，1859，1863，1870の年のものである。ホフマン自身の文典を出版する1869年以前の年代のものが3枚ある。

本文への書き込みはかなり多く，張り込まれたメモ書きも多い。インクも黒と赤の2種類が使われており，同じページに黒と赤両方で書かれているページもある。赤インクの書き込みは，比較的短い単語レベルの書き込みであり，日本語のローマ字綴りを訂正したところが多い印象を受けた。それに対し，黒インクの書き込みは，単純な訂正レベルのものから，数行にわたるものまで，多岐にわたっている。

こうした書き込みを反映したクルチウス文典の改訂版が出版されることはなかったが，ホフマン自身の文典を出版する前に，丹念に読みこんでいたことが伺える。

② オールコック『日本語文法要説』

この本は，改装された際，薄い罫線を引いた紙を差し挟んで製本されたようである。そうした製本形式を取ったのは，多くの書き込みができるようにとの意図があったと思われるが，実際はそれほど書き込みは多くない。注意を引いたのは，62ページ以下のpredpositionの箇所で，オールコックが英語の前置詞に相当する日本語を列挙している箇所で，細長い紙に「日本語見出し→英語」で単語を貼り付けているところである。Aidaから始まってはいるが，五十音順ではないようだ。

③ブラウン『会話日本語』

序にあたる「日本語文法」で，自身の『日本語文典』で相当する節（§）番号が書き込まれている。ブラウンの会話書は，ホフマンの文法書が出版される1867-8年より前の1863年に出版された本であり，ホフマンが緒言で「私の方法に基礎をおいているだけでなく，少しの例外はあるが，その全範囲に亘り，私の方法に従っている」（三澤光博訳『ホフマン日本語文典』緒言，p.xi）と書いてある本であるから，読んでいたと思われる。表紙裏に張り込まれている書店からの

書類には1865.1.25の日付がある。ただし，すぐ読んで書き込みもしたのか，その確証はない。

④　メドハースト『英和・和英語彙』

メドハーストの辞書は，前半が意味分類による英語見出しの「英和の部」，後半がイロハ順に並べられた「和英の部」である。その後半部に「イロハ」のインデックスが貼り付けられている。そのため，本を開かなくてもイロハ始まりのページを開けるようになっている。そして「和英の部」の多くの項目に鉛筆でドイツ語と思われる訳が付けられている。これは，自分の辞書出版の参考として，メドハーストの語彙集を読み込んでいたためと思われる。

5　アストンからの手紙

ホフマンの蔵書には，いくつか手紙が差し挟まれている。その中でも，日本語学と関係の深い　アストンからの手紙があったので，それについて報告する。

ホフマンの蔵書に，

A short grammar of the Japanese spoken language / W.G. Aston, 2nd ed. Belfast, 1871

があり，その中に，アストンからの手紙が差し挟まれている。A5判ほどの紙を二つに折り，表から文面が始まり，開いた裏ではなく，次の面に2ページ目が書かれている。本文は次のようである。

〔1ページ〕

1 Fitzroy Place
Belfast Ireland
June 28th 71[1]

Dear Sir,

I do myself the honor of sending you copy of a little book on the Japanese spoken language which I have just had printed. As you will perceive by the preface, it has a purely practical object, and has no pretensions to a scientific character.

The arrangement of the book (?) I have not seen in any European treatise. It is that universally adopted by the native grammarians with some slight modifications.

I am desirous of sending copies to M. M. Pages, De Rosny, and Pfizmayer, but I am unacquainted with their addresses. If you will kindly favor me with such of them as you may know, I shall feel

〔2ページ〕

greatly obliged.

I shall also be happy to furnish copies to any of your friends who may be interested in Japanese learning, and who may desire them

Believe me

Dear Sir

Yours very faithfully

W. G. Aston (signature)

Dr. Hoffmann

〔試訳〕

拝啓　出版したばかりの日本語の口語についての小冊子を貴殿にお送りできますことは，光栄の至りです。序文からお解りいただけますように，本書はまったく実用的な目的をもって書かれたものであり，科学的な性格を持つと主張するつもりはありません。本書の構成には，ヨーロッパの学術書を参照していません。本書に幾分かの変更を加えると，日本の文法学者によっても一般に使えるものです。

本書を，M. M. Pages氏，De Rosny氏，およびPfizmayer氏に送りたいと希望しておりますが，諸氏の住所を存じ上げません。もし住所をご存じのようでしたら，大いに感謝いたします。

お知り合いの方で，日本語を学びたいと思っていらっしゃる方に，本書をお渡しいただけても嬉しく思います。　敬具

この本のタイトルページには，「Dr. Hoffmann / With the author's compliment.」という献呈のサインがあり，アストンから送られたものであることが分かる。

アストンがベルファーストに休暇で戻っていたときに出した手紙であり，ホフマンをパジェスやロニー，プフィツマイヤーと同じかそれ以上の日本語研究者であると見なしていたことが伺える。当時の交友を伺わせる資料と言っていいだろう。

ホフマンがこの手紙に返事を書いたかどうかは解らない。ただ，この本にもホフマンによる書き入れがあり，校正ミスなどの正誤表を自分の手で作って貼り付

けてあるから，かなり丁寧に読んだことが解る。

おわりに

ホフマンはドイツ語を母語とし，オランダ語や英語そしてフランス語などにも通じていたと思われる。多くの書き込みがあるが，ドイツ語・オランダ語によると思われるものが大部分であり，私の語学力では，ペンで書かれたそれらの内容を十分に読み取ることができなかった。しかし，ホフマンの蔵書が一部であれ，ライデン大学に所蔵されているということは,広く知られてはいないようなので，それを知らせることも意義あることと考え，ここに報告した次第である。

【付記】本研究は、創価大学から在外研究としてオランダに滞在することを許可された成果の一部である。大学当局を含め、関係者に深く感謝します。